

水の都の物語

- FICPIヴェネチア・フォーラムに出席して

徳永 博 弁理士

[公開代償の謎]

ミラノの科学技術博物館に行くと、本館東側回廊に、レオナルド・ダ・ヴィンチの発明品の模型と彼自身のスケッチが整然と並べられていて、観る者を圧倒する。その中には羽ばたき飛行器、落下傘、起重機やかつて全日空が尾翼のマークに使っていたヘリコプターの図案や模型があって、はるか昔のルネッサンスの巨匠に、知的財産に携わる者として、親近感さえ覚える一時を過ごすことができる。(写真^{1,2})

しかし彼は、在世中はこれら自分の発明を特定の保護者以外には見せず、ひた隠しにしていたことでも有名である。展示されている彼の発明の彼自身の説明書は、わざと判読困難なように逆文字で右から左へと書かれていることも、他人の模倣を恐れたレオナルドの猜疑心を物語る。同じころフィレンツェで「花の大聖堂」のドームを設計したブレネルスキは、施工にあたって30メートルの高さまで石材を持ち上げる起重器を考案したが、それが衆人の目に触れることを恐れて、その秘密保持を市当局に要請したといわれる。それほどまでしながら多くの記録や業績を残したルネッサンス期の巨匠達の、模倣に対する警戒心を、誰も救うことは出来なかったのだろうか。

ここに一つ、逆転の発想がある。1474年ヴェネチア共和国特許法である。筆者が特技懇誌¹⁷⁹号で紹介したように、同年3月19日、ヴェネチア共和国は1



写真1 ミラノ科学技術博物館

つの布告を出した。いわく技術の公開の代償に、発明者に一定期間独占権を与える、という。レオナルドに代表されるように、当時の発明者が最も恐れた技術の公開を、あえてした者には、当該技術につい



写真2 ヘリコプターの模型

て一定期間独占権を与える、と言うのである。それを共和国政府機関が布告によって推奨し、司法制度がこれを保証するという。皮を切らせて肉を切る、の類か。これは中世屈指の商業都市ヴェネチアの市民にして初めて発想し得た知恵ではなかったのだろうか。そしてもう一つには、個人の権利主張と社会の繁栄を同時に実現させる法律運用のしたたかさが、この布告に見られるのである。

ヴェネチアといえはすぐ思い出すのは、シェークスピアの「ヴェニスの商人」だが、債権者のシャイロックが借金の担保に取ったはずの債務者の肉¹ボンドは、一滴の血も流さないでは債務者の肉体から切り取ることは不可能であることを気付き、債務者の命を救った若い女性判事の機転は、いかにもヴェネチア人らしい発想の賜物であった。我々はここに公開代償という怪しい発想を現実の法律に仕立て上げた、ヴェネチア人のしたたかな知恵を、英国人シェークスピアの名作の中に発見して、ほくそえむ。私はなぜこんな矛盾した発想が共存するのかと、長年心に引掛かりを覚えていた「公開代償」の謎を、「ヴェニスの商人」によって解きほぐされる思いがした。

〔海上都市ヴェネチア〕

このようにしたたかな知恵者ヴェネチア市民が築き上げた都市もまた、したたかなものであった。

北イタリア、トスカーナ平原を旅すると、小高い丘の上に、城壁に囲まれた小さな町が点在している。パルマ、シエナ、後に大学や商館で平原に拡がったボロ・ニアやフィレンツェも、領主の居城と教会を含む旧市街地は、しっかりとした城郭の中にあって、戦争に備えており、中世この地方で、都市国家間に紛争が絶えなかったことを、今に伝えている。今は教皇庁の所在地として、全世界のカトリック信者の崇敬を集めているバチカン市国も、その南半分は城郭で囲まれている。しかし、平原の東端の、多くのラグーンがやがてアドリア海になる干潟に居た人達は、丘に逃れる代わりに干潟の外れの小さな島に、自分たちの都市を建設することを思いついた。9世紀のことというから、わが国では奈良の都が栄えた頃である。

人々は平原の北の山地から伐採してきた松材を杭にして、湿った島の地盤に数万本も打ち込み、その上に水を通さないアストリア産の石材で囲った空間を幾つも作り、石造の家を建て、その間を大小の運河を走らせ、交通網とした。そして人々はせせと船を作り、平時は物の運搬船、戦時は軍船となって、平原からの攻撃に備えた。他の都市のように城郭は不要、和戦両方に備えた、海上都市の誕生である。

後年、欧州全土を席卷したナポレオンの軍隊や、ナチスドイツの電撃作戦にも耐えた海洋国家大英帝国の難形が、ここアドリア海の一部に、10世紀も前に誕生していたとは、驚きである。しかも、ヴェネチア人の知恵は、貴族の中から選ばれた人達の集団統治によってこれを推進したことである。そして海軍による防衛は、大型ガレー船によるトルコとの貿易へと展開した。時には十字軍に加担して、東ローマ帝国コンスタンチノーブル陥落に手を貸したこともある。しかし平時は、当時繁栄を極めたイスラム世界への通商の窓口となることによって、この海上都市国家に、巨万の富をもたらした。それまで本土との間の城壁の役割を果たしていた護岸が、今度は通商貿易船の発進基地となり、石造の倉庫や造船所



図1

が島の東に作られた。また通商貿易は、イスラム世界の優れた科学技術 - アラビア数字だけを取上げても、中世ヨーロッパのローマ数字より遥かに便利なものだった - が、通商国家としてのヴェネチアを育て、またヴェネチアを窓口にしてイタリア全土にもたらすことによって、ルネッサンスの端緒となった。今、ヴェネチア本島を逆S字状に流れる大運河を抜けて海洋に出たところに、金色の頂像を輝かせたサンマルコの鐘楼と、乳白色のドッカラーレ宮殿が、ヴェネチアの富を象徴するように建っているが、これこそが先に見たイタリアの城郭都市に比べ、ヴェネチアが開放された通商都市国家であったことを、雄弁に物語っている（図1）。そして、このドッカラーレ宮殿の主、貴族の中から選挙された元首（ドージェ）は、ヴェネチア統治の象徴であって、決して権力者ではなかった。歴代76人の元首の内唯1人、内外に名声を輝かせていたマリノ・フィリエールは、権政欲を持った嫌疑で死刑になったほどである。このような政治風土が、無名の行政官の自由闊達な発想を育て、「公開代償」という、一見網渡り的な制度を創りだしたとしても、不思議でない。

〔FICPIフォーラム〕

今年のFICPI（国際工業所有権代理人連盟）フォーラムは、10月にこのヴェネチアで開催されることになった。そのすぐ後に、アジア弁理士協会福岡総会等を控えて、日本からの参加者は少ない。しかも通勤途中の地下鉄虎ノ門駅には、何を思っか「ヴェニスに行くのはやめた」 Gondolaより屋形船—という大広告が出たので、一瞬ぐらついたが、先にも述べたように、逆転の発想「公開代償」の発祥地であるヴェネチアを、この目で確かめておかなければ、知的財産業務に携わる者としての資格が無い、とか理屈を並べて、事務所からの公用出張にしろまい、勇躍「ヴェニスに行く」のを早めた。

ヴェネチアに行くのは、船以外の方法は無かったのだが、それではあまりにも不便だということで、前世紀にイタリア国鉄が本土から橋を掛け、終着駅「サンタ・ルチア」を造った。しかしここから徒歩で行けるのは島のほんの一部で、駅前の船着場に来る水上バスか、水上タクシーを使う。名物のGondolaは観光用貸切で、乗る前に横縞のシャツを着たゴ

ンドリエーレと、先ず値段の交渉をしなければならない。FICPI会場は本島からさらに外洋へ行ったリド島のホテルなので、水上タクシーのモーターボートを使ったら、70ユーロも取られた。リラが通貨だった頃は、十数万リラという数字に、腰を抜かしたことだろう。

リド島はアドリア海に面した海水浴場に、別荘とホテルとカジノを抱えたリゾート地で、10月のオフシーズンには閑散としていた（写真3）。面白いのはこの島だけはフィアットやアルファ・ロメオが走り回っていることで、会場となったホテル、かつて「ヴェニスに死す」という映画のロケが行われたホテル・デ・バインへ行くのに貸切バスが仕立てられた。ちなみにヴェネチア本島では、手押し車以外の車両は一切乗り入れ禁止である。

FICPI第8回フォーラムは、ヨーロッパを中心に約

500の参加者が、2日間3つのセッションに分かれて、発題と質疑応答が活発におこなわれた。特に最近、EPCに加盟を許されたバルト3国やポーランド等、北欧、東欧の国々からの参加者が多く、古参会員であるエストニアのユーリ・カオサルさんは、この時とばかりバルト3国の特許事情を紹介し、得意になっていた。彼は鉛筆のコレクターとしても有名で、私が新幹線車両の模様が入ったトンボ鉛筆を土産に持っていったら、大変喜んでいて、今度東京に行く時は、三菱鉛筆を集めるそうである（写真4）。

〔コルデ・デル・ミリオン〕

リド島のホテルからヴェネチア本島へは、1時間に1便のシャトル・サービスがあるので、暇を見てはこれを利用した。サン・マルコ広場に近い船着場のすぐ前は、赤茶色のホテル・ダニエリ、ここは第4次十字軍のコンスタンチノーブル攻略で悪名を天下に轟かせたドージェ、ダンドロの子孫の居館だった所、内部は種々の大理石で彩られた床や回廊で狭い空間を生かした豪華な造りが、当時のヴェネツィア貴族の生活を今に伝えていた（写真5）。なにしろ松杭とアストリア護岸



写真3 リド島のホテル



写真4 FICPI第8回フォーラム

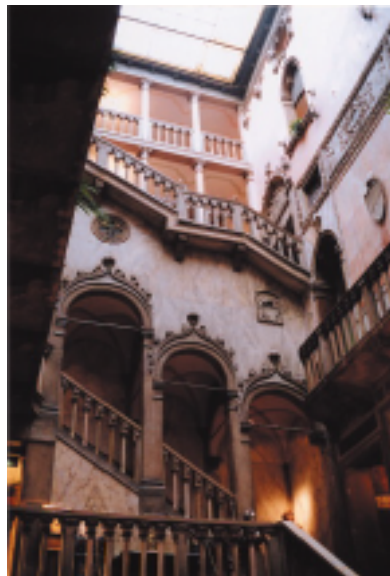


写真5
ダンドロの居館



写真6 貴族館の正面

によって海上に建っている石造の家だから、貴族の館も商館も5階くらいが限度である。サン・ジミニアーニのように塔の高さを競うことは出来ないで、人々は建物の外観、特に窓やテラスのデザインに趣向を凝らした。ビザンチン様式、アラビア風、ゴシック、ロマネスクとあらゆる建築様式の窓や柱列が、種々の色彩の石で一つの建物の正面を飾っており、それが運河に面しているのだから、画家や建築史に興味のある者にはたまらない(写真6)。

家の間の迷路を行くと、所々に小広場(カンボ)があり、その中央には決まって井戸があった。海上都市は船と同じで、生活用水の確保に苦勞する。ヴェネツィアでは天からの雨水をこのカンボの地下に椀状に積んだ砂層にしみこませ、中央の井戸から汲み上げた。かつてマルコ・ポーロが住んでいたコルデ・デル・ミリオンもその一つで、50メートル四方のちっぽけな広場の中央の井戸は、私が訪ねていった時には改修中だった(写真7)。この「ミリオン」(百万)という広場の名前の由来は、東方の旅から

写真7
コルデ・デル・ミリオン

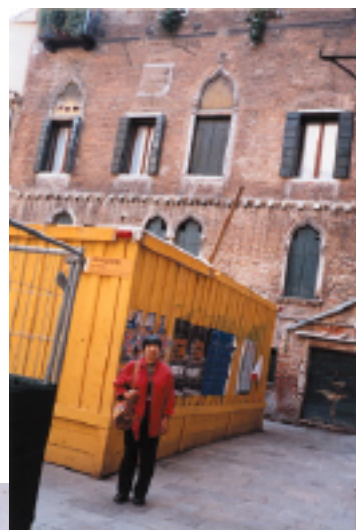


写真8
カンボ・サン・パウロ
の水道蛇口

帰国したマルコ・ポーロが、ここで「中国の先には黄金の国ジバングがある」などと、途方も無い話をしたので、この「途方もない」から来たのだという。京都の「百万遍」とは似て非なるものだった。

20世紀になってこんな雨水溜りの井戸ではとても間に合わないと、水道の蛇口になったところもあるが(写真8)。それでも市民に対する生活水の供給は十分といえない。古代ローマ時代から、周囲のロンバルディア平原から水道で豊富な水を供給し、大広場(ピアッツア)に大噴水を造営したローマと比べ、海上都市ヴェネチアが水で苦勞しているとは、皮肉なことである。

〔生き残りの努力〕

そのヴェネチアのもう一つの泣き所は、招かれざる水、高潮の被害である。毎年秋から冬にかけて、

サンマルコ広場は膝まで海水につかる。船着場に防潮堤を造る案もあるが、これでは名物のゴンドラが着岸できなくなる。現在のところ広場には常時、脚の高い長テーブルが用意されていて、高潮がくるとこれを縦に並べて人の通路にするそうだが、姑息な対応策にすぎない。ピサの斜塔は基礎工事のやり直しで倒壊をまぬがれたが、高潮に沈む都市ヴェネチアを水没から救うには、どうしたらよいのだろうか。

本島の東側、今は使われなくなった造船所跡の倉庫群を利用して国際建築ビエンナーレが開催されていた（写真9）。そのテーマの一つは港湾の再生である。護岸やかさ上げ工事の模型は、ヴェネチア市港湾局のものだった。横浜の「みなとみらい21」もパネルで紹介されていて、面映かったが、今ヴェネチアは先祖が残した国防や通商上の有利さが逆に負の遺産となっており、それを打開して21世紀に生き残るために、模索していることがありありと見て取れた（写真10）。

15世紀にこの地で誕生した知的財産制度は、今全世界に広がって、順風萬帆のように見えるが、この沈み行く海上都市を救う知恵が何も生まれて来ないとしたら、それは親不孝と言われても仕方が無い。そのように、行き過ぎた文明開化によって痛めつけられている地球環境を保護し再生させ、人々がより住みやすいものにして後世に残すことが、現代科学技術と知的財産文化に求められている。FICPIフォーラムがこの沈み行く海上都市ヴェネチアで開催されたことを機会に、考えさせられたことであった。

Profile

徳永 博（とくなが ひろし）

1938年（昭和13年） 佐賀県に生まれる
1962年（昭和37年） 特許庁入庁
1966年（昭和41年） 審査官（審査第二部建設）
1989年（平成元年） 工業所有権研修所長
1991年（平成3年） 退官、弁理士



「ヴェネチア1474年」



写真9 国際建築ビエンナーレ会場



写真10 港湾再生の展示パネル